

多くの人がビーチに魅了された 『ビーチライフin須磨2022』



大いに盛り上がりを見せたビーサン跳ばし大会



ビーチバレーボール佐伯美香カップ



ビーチウッドボール大村杯の表彰式

2017年からスタートした須磨海岸での活動を『ビーチライフin須磨2022』と改め11月6日（日）、兵庫県神戸市須磨海岸で開催された。JR須磨駅を降り立つとほんの数秒でたどり着く好アクセスのビーチエリアが賑わいを見せた。今年はビーチウッドボール大村杯、ビーチバレーボール佐伯美香カップ、ビーチサン跳ばし大会やビーチバレーボール体験会など老若男女が楽しめるビーチスポーツイベントが顔を揃えた。

例年、多くの人々を魅了している「すま（須磨）いる食堂」も、数々の地元飲食店が腕によりをかけて出店。澄み渡る秋空の下、およそ800人が大会に参加し、熱戦を繰り広げた。

第①回 自然にふらり立ち戻る 地域と地域をつなぐ橋



日本ビーチ文化振興協会 顧問
早稲田大学法学部 法学専攻教授
元兵庫県警 警務官
森本英香
Hidaka Morimoto

2013年に生まれたのが「一の橋バイオレレッジ」です。ここは住宅の給湯・暖房はすべて木質バイオマスボイラーから供給されており、とにかく暖かい。長屋の集合住宅は外廊下でつながっていて、お子さんも遊べるスペースもあり、住居の他にも、宿泊施設も完備しています。当初は、元々の住居を離れられずにいた高齢の方たちも「一の橋バイオレレッジ」に立ち寄り、宿泊利用するようになりました。そこでときには子どもたちの声を聴くようにすると「ここに住み替えでもいい」という気持ちが生えていったそうです。ゆつくりとハードルを下げていくことで、一の橋地区は現在、集住化に至ることができました。人の心は強引な方法では動かないもの。自然を活用したアイデアが結果的に人の心を動かしたのです。

笑顔がはじけたかわさきの浜。 『第49回川崎みなと祭り・はだし運動会』

川崎市にも靴を脱いで遊べる浜があることを知ってもらいたい。そんな願いのもと、企画された『第49回川崎みなと祭り・はだし運動会』が2022年10月8日（土）、東扇島東公園かわさきの浜で開催された。

このかわさきの浜は、防災拠点施設でもあることから、参加する子どもたちにその役割を再認識してもらいたいという狙いもある。種目にはビーチサン跳ばし、麻袋レースのほかにもレスキューレースもプログラムとして取り入れられている。

2019年は台風上陸、2020年以降はコロナ禍で中止。実に4年ぶりの開催となった今年はおよそ50人の子どもたちがビーチに集結し、元氣いっぱい笑顔がはじけた。

編集後記
足跡のはだし
佐伯美香
ジャパンビーチゲームズフェスティバルは、年々進化を遂げています。2023年お台場は競技種目も20種目となりエリアも拡大して実施します。また、これまで須磨で開催されてきたビーチライフは、「第1回ジャパンビーチゲームズ」へ飛躍します。ビーチライフにおいても、九十九里や南紀白浜など新たに開催される地域も続々と増えています。コロナも落ち着いてきたことで、ますます多くの皆さんが、日本最大規模のビーチ&マリンスポーツのイベントに來場されることを期待しています。安心、安全に運営を行い、ビーチスポーツの魅力を示すところなく伝えることに努めて参ります。

INFORMATION
あなたの街のビーチや港を紹介しませんか？
「はだし文化新聞」では、皆様の街のビーチや港の情報を随時募集しています。ぜひご意見をお寄せください。
〒104-0033
東京都中央区新川1-17-3階
NPO法人日本ビーチ文化振興協会
「はだし文化新聞」お便り係
メール: info@beach.jp
ファックス: 03-3552-1220

※欄不同

ツボを押さえて読むほどハマる！

はだし文化新聞

ふむふむ

No.16 2023 5/15

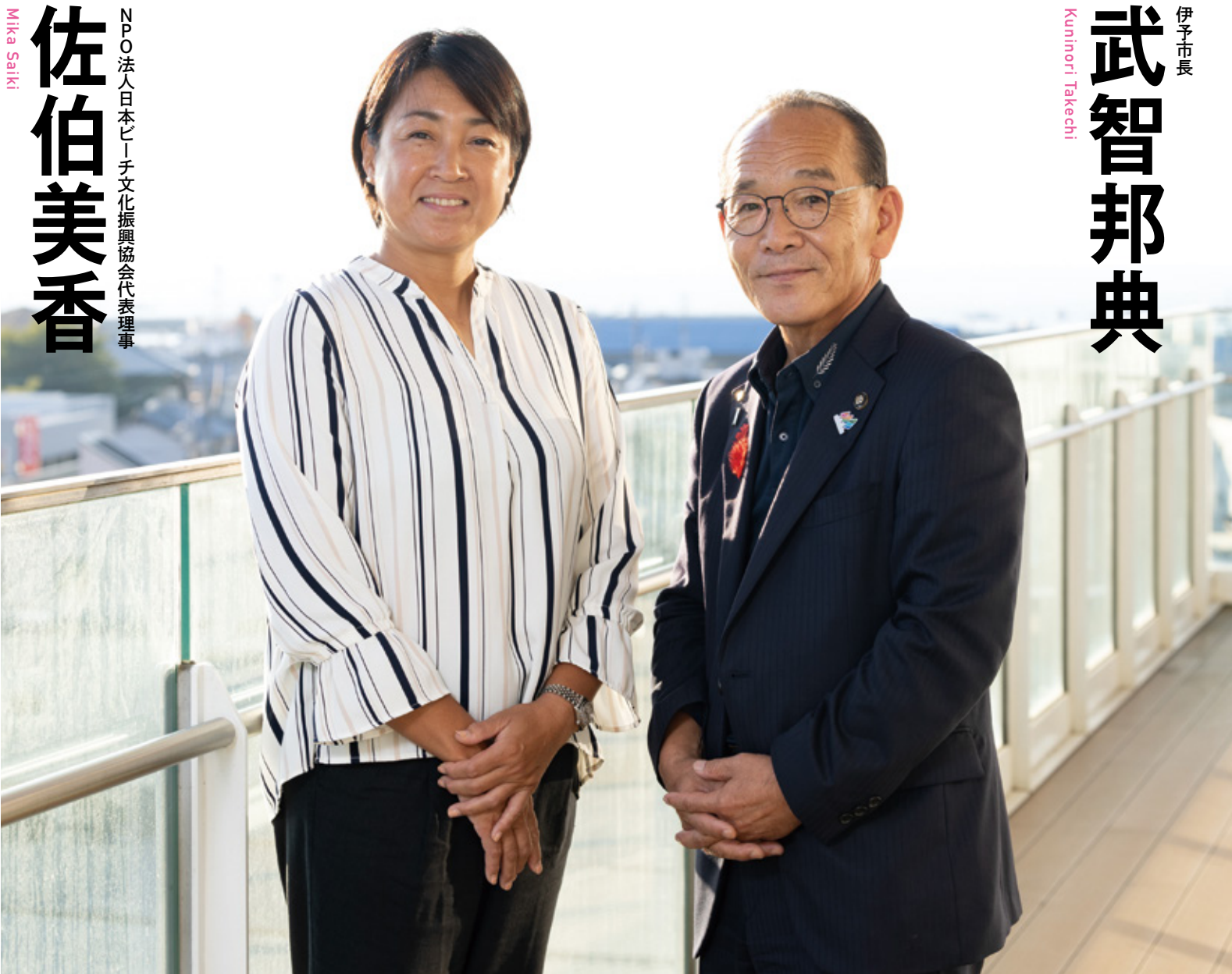
2023年5月15日発行 通巻 第16号
発行/NPO法人日本ビーチ文化振興協会
編集人/佐伯美香
〒104-0033 東京都中央区新川1-17-3 リバーサイド茅場町3階
電話 03-3552-1171

編集スタッフ/吉田亜衣 (BeachvolleyballStyle)
デザイン/島内泰弘デザイン室

INDEX

- 1面 ・特別対談
武智邦典伊予市長×佐伯美香代表理事
2-3面 ・家族連れを中心に1万人が来場
「ジャパンビーチゲームズフェスティバル千葉2022」
・創立20周年を祝う「2022年度 活動報告会」4年ぶり開催
日本ビーチ文化振興協会、
「みなとSDGsパートナー」に認定される
・連載：朝日健太郎が自利する砂ソムリエ
4面 ・連載：NewSportsPower
・連載：おらが街のビーチ自慢
・多くの人がビーチに魅了された「ビーチライフin須磨2022」
・笑顔がはじけたかわさきの浜。
「第49回川崎みなと祭り・はだし運動会」
・新連載～自然にふらり立ち戻る～ 森本英香
・2023年間活動予定

武智邦典

伊予市長
Kunimori Takechi

特別対談 武智邦典伊予市長 × 佐伯美香代表理事

365日、人が集う 場所づくりを目指して

愛媛県の中心部からも好アクセス、豊富な観光資源を有している伊予市は、四国の中でもビーチスポーツが発展してきた有数の地である。なぜ、伊予市はビーチスポーツの普及に努めてきたのか。2013年から市長として精力的に活動してきた武智邦典伊予市長に伊予市の魅力をお伺いするとともに、今後のビーチライフに向け、佐伯美香代表理事と意見交換を行った。 Photo/ Takahisa Hirano

佐伯 昨年10月に開催された『ビーチライフin伊予2022』は、四国で初めての当協会主催「ビーチライフイベント」になりました。ビーチバレーボールだけでなくビーチテニスやフラダンスなどさまざまな団体が五色姫浜公園に結集しました。

武智 お子さんを含め多くのご家族が五色浜を訪れて賑わっていました。私も参加させていたしましたが、見事なコラボレーションイベントでした。

佐伯 伊予市は1997年からビーチバレーボール高校生女子の全国大会『モドンナカップ』を五色浜で開催されてき

ましたが、なぜビーチバレーボールを応援してくださるのでしょうか？

武智 6年前、国の推計で伊予市はこのまま何も策を施さなかったら、2040年には人口が27000人という驚愕の数字が出ました。そのときに私が旗揚げしたのは「3万人が住み続けられる環境整備、3万人を支える産業の育成などを柱にした誰ひとり置き去りにしない伊予市」というビジョンです。そこから種まきを始め、職員一同で本気で取り組んでいます。モドンナカップを通じて五色浜の魅力を全国に発信することは、関係人口、交流人口増加につながるという狙いがあります。

佐伯 近年ではビーチバレーボール以外にも、テニスやフレスコボールを平日に楽しむ方々を見かけるようになりました。武智 市民の方からも五色浜をハワイのワイキキビーチのようなビーチにしたいという声も頂いています。その開放感ある美しいビーチを拡散していくとともに、市では伊予の山々と松山平野をつなぐ構想を掲げています。例えば、伊予・中山の森林公園から伊予上灘・双海のビ

五色浜の魅力を
全国に発信することは、関係人口、
交流人口増加につながる



ロナ禍になって東京からきて仕事場を構える方も増えました。これからインバウンド効果も高まることで、よりディープなスポーツが目目されるでしょう。

佐伯 市長のおすめは？
武智 2020年に新駅として開業したJR南伊予駅周辺です。私は「ジュエリーステーション」と呼んでいます。松山から車両基地が引越してきて、その広いフィールドは夜になるとイルミネーションがともきいて、す最新のターテーブルも備えており、まさに鉄道ファンからしたら垂涎の的になる新スポットです。

佐伯 それはたくさんの人々が訪れますね。市長の話題作には頭が下がります。

武智 五色浜以外にも瀬戸内海特有のべたなぎで夕日を見渡せる双海町も、ビーチサッカーやパラグライダーで盛り上がりつつあります。佐伯代表理事には、今後もビーチスポーツを活用して「森・里・海」をつないでいただく活躍を期待しています。

佐伯 はい。365日人が集う場所づくりを目指してがんばります。本日はありがとうございました。

近年は平日でもさまざまな
ビーチスポーツを楽しむ方々を
見かけるようになった



佐伯美香

NPO法人日本ビーチ文化振興協会代表理事
Mika Sakai

New Sports Power ⑫

〈ビーチで生まれた新競技〉

文／小崎仁久

コースタルローイング
Coastal Rowing

波や風、ブイを回る技術、走力。レガッタにはない面白さ



上：体験会場では一際人気を集めている
左：波や風を感じながら海上を楽しめるのが魅力

コースタルローイングは意外にも歴史の浅いスポーツである。コースト（沿岸）でのローイング（競漕）が行われ始めたのは1980年代後半。ルールが定められ、世界選手権が始まったのは2007年のことだった。

競漕自体の歴史は古く、古代エジプトですに行われていたとも伝わる。近代のボート競技が確立したのは18世紀五輪種目には1900年から採用されている。ただし、これまでは河川や湖など波のない水面で競われてきた。そのため「真つ直ぐに漕ぐ動きをシミュレーションに追求する競技でした」と日本ローイング協会コースタルローイング部フィサの武田泰明さんは話す。

しかし、コースタルローイングの主種目であるビーチスプリントは、漕ぎ手が砂浜を走ってスタート。波打ち際でボートに乗り込み、沖合に設置されたブイに向かって漕ぎ出す。ブイを回り再びビーチへと戻り、最後はボートを降り、走ってゴールイン。「波や風などがあり、ブイを回る技術、走力も必要。レガッタにはない面白さがあります」と武田さんは話す。

対戦形式で2〜4分と短時間で勝負が決まるのも魅力。観客も競技のすべてを見渡すことができ、世界選手権でもビーチの効いた音楽がかかる中、レースが行われ、大変盛り上がりつつある。

このエンターテインメント性の高さと、2028年ロサンゼルス五輪での正式種目採用も有力視されている。究極なストイックさで他者には理解されないと言われるボートも、コースタルローイングで競技人口が激増するかもしれない。



伊予彩まつりでの花火



おらが街の味・カツ丼

郡中地区のB級グルメとして地元で愛されているカツ丼。卵でとろけるのではなく、だしをかけてのが特徴です。また、全国トップクラスの水揚げ量を誇る双海町下灘地区のハモは、市内の飲食店などで食することもできます。



創立20周年を祝う『2022年度活動報告会』。4年ぶりに開催

今年、創立20周年を迎えたNPO法人日本ビーチ文化振興協会は2月14日（火）、東京都内にて『創立20周年2022年度活動報告会』を行った。

年に一度開催されていた活動報告会は、2020年以降コロナ禍を鑑み、開催を控えてきた。4年ぶりとなった活動報告会は、創立20周年の足跡を振り返る場となり、およそ70

上：左から浦田聖子理事、大村会長、感謝状が授与された大木千葉副市長、佐伯美香代表理事
下：元理事長の朝日氏もお祝いの言葉を述べた



名が出席。会長の太村哲夫氏の開会の挨拶を皮切りに、元理事長の朝日健太郎（参議院議員）氏をはじめ多くの来賓が祝福の言葉を寄せた。

また、「ジャパンビーチゲームスフェスティバル2022千葉」の開催に貢献した千葉市長の神谷俊一氏（当日は副市長の大木正人氏が代理出席）へ感謝状が授与された。

感謝状は昨年代表理事に就任した佐伯美香氏が閉会の挨拶を行い、会を閉めた。

日本ビーチ文化振興協会、
「みなとSDGsパートナー」に
認定される

「みなとSDGsパートナー」シンボルマーク

SDGs達成に向けた活動や取り組みの推進を図るため、活動している港湾関係企業や団体を登録する「みなとSDGsパートナー」に、NPO法人日本ビーチ文化振興協会が認定された。

この登録制度は、国土交通省港湾局が行っているもので、活動を「見える化」することで港湾全体の魅力向上と持続的な発展に貢献することを目指す。

的としている。

認定された企業および団体は、シンボルマーク（右）の使用が認められ、SDGs達成に資する取り組みを広めることができる。

NPO法人日本ビーチ文化振興協会は、「今後と海辺の活用を通じて、次世代によりよい海辺環境を引き継げるよう邁進してまいります」と活動に意欲を見せた。

おらが街の
ビーチ自慢

～ここはいいトコ、一度はおいで～



地域DATA
人口 35,838人（2022年10月時点）
代表ビーチ 五色姫海浜公園
観光名所 JR下灘駅
名産 削り節、ハモ、栗
宿泊施設 約10施設

愛媛県・伊予市



佐佐谷の雪景色

愛媛県伊予市は、海、山、自然が豊かな街。季節ごとに表情を変える街。鉄道路線、高速道路、主要国道等により、周辺地域からアクセスしやすい立地にあります。

伊予灘に臨む沿岸部の伊予・双海それぞれの地域に海浜公園があり、夏は県内外から海水浴客で賑わいます。

山間部の中山地域では、キャンプや冬の雪景色を楽しむことができます。

とができ、自然が豊かで住みやすい街です。

そんな伊予市の自慢のビーチは、五色姫海浜公園。毎年8月にビーチバレーボール高校生女子全国大会「マドンナカップ」が伊予市で開催され、ビーチバレーボールのメッカとして全国的に広く認識されています。

またビーチテニスやビーチヨガ、フリスビーなどの活動拠点になっていて、ビーチスポーツが盛んに行われているのも特長です。

家族連れを中心に1万人が来場。

『ジャパンビーチゲームズフェスティバル千葉2022』

2年ぶり2回目の開催となった『ジャパンビーチゲームズフェスティバル千葉2022』が10月22日（土）、23日（日）の2日間、千葉県千葉市の稲毛海浜公園いなげの浜で開催された。

今年、「千葉市をビーチスポーツのメッカに！」というコンセプトのもと、千葉市政令指定都市移行30周年の記念イベントも兼ねた。過去最高の16競技の大会や体験会が展開され、2日間でおおよそ10000人が来場。家族連れ

れを中心に子どもから大人まで爽やかな秋風が吹き抜けるビーチを満喫していた。

誰もが楽しめる「ニュースポーツの参入」

今回、新たな競技として参入したのは、テックバレーボールとラウンドネットだ。テックバレーボールはハンガリー発祥のスポーツでバレーボールと卓球を組み合わせた競技でテーブルを用いる。ラウンドネットは、中心に円形のネットを置いて行う。

- A 桟橋からサンセットを眺める来場者たち
- B テックバレーボールを楽しむ家族
- C 気軽に遊べるネットスポーツ・ラウンドネット
- D 各競技の代表者と開会式出席者でのセレモニー



両競技ともに2対2で行い、3タッチ以内で相手側のネットにおよびネットに返し、相手が返球できないと得点になる。

テックバレーボールもラウンドネットも、身長の高低差、性別、年齢にかかわらず誰でも楽しめるのが特徴。遊び感覚で気軽に体験できることもあり、来場者の興味を引いていた。

千葉市のシンボル
海へ延びる桟橋

千葉市の海辺のグランドデザインによって2022年に建設された海へ延びる桟橋も、このイベントでは初のお披露目となった。

カフェも併設している桟橋の上からはビーチスポーツが一望でき、夕刻にはサンセットを眺められる空間として、大盛況だった。まさに千葉市のシンボルになりつつある名所は、今後も人々を惹きつけそう。



山武郡・九十九里町

日本・千葉県

第14回

砂ソムリエ

〜朝日健太郎が目利きする〜



元プロビーチバレーボールプレーヤー・朝日健太郎が各地の砂を踏んで触って「ビーチスポーツにふさわしい砂を選ぶ」「砂ソムリエは、足跡の数で評価する。足跡3つが最高。第14回連続で取り上げるのは、日本最大級の砂浜海岸と知られる千葉県山武郡・九十九里浜の片貝海水浴場。

この大海の遙か彼方には、ビーチバレーボール発祥の米国西海岸が。素足の裏から、そんな情景が浮かんでくる。ボールの弾む音や歓喜の声も聞こえてきそう。

日本有数の長さを誇る九十九里は、まさに世界へ開かれたビーチである。太平洋を、いや地球を周遊してきた砂たちが集うこの地は、各々のイマジネーションを大いに刺激してくれる。この砂粒はいったいどこからやってきたのか。

はだしで踏み入れて、海を、世界を、地球を感じるその瞬間を楽しんでほしい。九十九里の、いや日本のプライドを示すこのビーチで。

